

外国人留学生・就学生と日本語メディア

石野博史（城西国際大学）

新プロ「日本語」研究班1の研究テーマの一つにメディアと日本語の国際化の関係にかかわるものがあり、NHK放送文化研究所が中心になって作業を進めている。平成6年度には日本在留の外国人5グループ34人の集団聞き取り調査を行い、第2回研究報告会その他で結果を報告したが、平成8年度は、それらの知見に基づき、日本における留学生・就学生（以下、簡単のために留就学生と言う）のメディア接触の実態等を知るためにやや規模の大きいアンケート調査を計画・実施した。結果は目下分析中であり、現段階ではそのすべてを報告することはできない。本稿では、調査の概要と結果中の主だった点のいくつかを記して中間報告としたい。

調査の概要

< 1 調査目的 >

日本に在留する外国人留就学生の日本語の使用状況、日本語学習の動機、学習方法や学習上の問題点と、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌等のマスメディアとの接触状況を探り、日本における外国人留就学生の日本語環境を明らかにすることを目的とする。

< 2 調査相手 >

留学生 387 人、就学 113 人、計 500 人。

なお、下記の各大学、日本語学校にお願いし、ご協力をあおいだ。厚く謝意を表したい。千葉大学、一橋大学、埼玉大学、早稲田大学、法政大学、亜細亜大学、東洋大学、中央大学、茨城大学、山梨大学、江戸川加チャ-センター、新宿日本語学校、CLC日本語学院

< 3 調査方法 >

手渡し配付回収方式。上記の大学および日本語学校の留就学生担当者がアンケート用紙を個別に手渡しにより配付、のち学内窓口で回収。（なお、アンケート用紙は、日本語・英語版、日本語・中国語版、日本語・韓国語版の3種類を用意した。）

< 4 調査項目 >

おおまかに次の4つに分類できる。

- (1) 留就学をめぐる諸事情に関するもの
- (2) 日本語の学習や能力に関するもの
- (3) マスメディアとの接触状況に関するもの
- (4) 日本語学習とメディア接触とのかかわりに関するもの

< 5 調査時期 >

平成8年8月～10月。

< 6 調査実施 >

NHK放送文化研究所用語班（代表最上勝也）と石野博史が協力してアンケートの内容を作成し、調査実施そのものは株式会社サーベイリサーチセンターに委託した。

< 7 その他 >

回答に関連した、より詳しい情報收拾などを目的として、回答者のうち、特に10名（留学生8名、就学生2名）について聞き取り調査を行った。

調査の結果から

< 1 調査相手のイメージ >

日本に在留する外国人留就学生の生活条件や日本語能力は、個人や地域、また学校等によってかなり違っていると予想される。今回のアンケート回答者は、首都圏および関東圏の一部の留就学生に限られており、今回の調査結果が日本での留就学生の実態を忠実に反映しているとは多分言えないであろう。次に記述する今回調査における平均的回答者のイメージは、もしかしたら比較的恵まれた層の留就学生の姿であるのかもしれない。結果の読み取りにあたっては、それなりの配慮が必要であることをまずお断りしておく。（以下の数字は、特に説明のない限り、全回答者数を100としたパーセントである。）

- (1) 性別：男 51%、女 49%とほぼ同数である。
- (2) 年齢：20代 75%、30代 22%、その他 3%。
- (3) 国籍：中国 34%、台湾 7%、韓国 37%、その他のアジア諸国（東南アジア）15%、欧米 7%。東南アジアでは、マレーシア 5%、インドネシアと香港 2%、欧米ではアメリカの3%が多い。
- (4) 母国での最終学歴：母国での大学卒業者が 41% と半数近い。高校卒 29%、専門学校卒 9%。
- (5) 専攻分野：留学生の場合、工学 21%、経営学 13%、経済学と社会学 12%、文学と教育学 6%。就学生では、将来の希望として、語学 17%、芸術 10%、工学 9%、経済学 6%、文学 5%。留学生との違いが顕著である。
- (6) 留就学の目的：第1目的では、「日本語以外の学問や技術を身につけるため」32%、「日本語を勉強するため」25%、「学

位を得るため」24%。第2目的では、「日本の文化や日本の事物を知るため」26%、「日本語を勉強するため」22%。

(7)留就学の費用：依存度の第1位は「家族」30%、「現在の仕事」21%、「日本政府からの奨学金」19%、「母国および日本政府以外の奨学金」12%。しかし、依存度2位以下も含めて総合的に見れば、「現在の仕事」への依存度が最大で、次に「家族」である。

(8)アルバイト：アルバイトに従事する者は58%。1週間の労働日数は、5日間というのが26%で最多であるが、平均では3.7日である。1週間の延べ労働時間は、20~25時間が29%で最も多く、それ以下が50%、それ以上が18%。なお、アルバイトの時間帯は夕方約半数、昼間と夜が各20%強、また職種は飲食業42%、事務25%、サービス業21%。

(9)住まい：アパート・マンションが約半数、学校や会社などの寮に住む者が3人に1人。

(10)所有するメディア機器：テレビ94%、電話85%、ラジオ82%、テープレコーダー74%、ビデオ66%、パソコン30%、ワープロ23%、FAX22%。

(11)日本の暮らしの満足度：「たいへん満足」19%、「大体満足」65%。

< 2 日本語の何がむずかしいか >

「発音・アクセント」「意味の似たことばの使い分け」など16の項目を示して、日本語を勉強していて特にむずかしいと思うのはどれかと尋ねた。多かった答えは「『ソヨソヨ』『ワクワク』などの擬声語・擬態語」57%、「方言」52%、「敬語」49%、「外来語」45%、「発音・アクセント」44%、「『手を切る』『顔を出す』などの慣用句」43%。首都圏での調査なのに、ほぼ半数が「方言」を回答したのは意外であった。なお、当然予想されたことであるが、日本語学習の進んでいる留学生と進んでいない就学生とで、あるいは中国系の留就学生と韓国の留就学生とでは、困難を感じる対象が異なる。例えば「発音・アクセント」をむずかしいとするのは就学生では6割弱、それが留学生では4割に減る。ところが、「『は』『が』などの助詞」をむずかしいとするのは、就学生よりも、むしろ学習の進んでいる留学生である。一方、「敬語」や「方言」に関しては留学生と就学生とで差は見られな

い。そのほか、韓国の留就学生は「『は』『が』などの助詞」を、中国系の留就学生は「漢字の読み方・書き方」を得意とし、欧米系の留就学生は外来語には苦労しないが、漢字は非常に苦手であることなどは、ことさら言及する必要のないことであろう。

< 3 テレビをどれくらい見るか >

テレビを見ないという者は6%のみで、程度の差はあれ、ほぼ回答者全員がテレビに親しんでいる。それも毎日見るという者が53%と見る者の半数を超える。平均では週に5.2日である。1回の平均視聴時間は2時間程度、1週間では12~13時間程度の視聴がいちばん多いようであるが、中には週30時間で見える者も6%程度いる。よく見る番組の種類は報道84%、ドラマ・映画79%が断然多く、音楽44%がそれに次ぐ。よく見るテレビ局はNHK総合40%、フジテレビ29%、日本テレビとテレビ朝日22%、TBS21%。ただし、韓国や東南アジアの留就学生が最も好むのはフジテレビである。また、テレビ視聴の目的は、「日本語の勉強のため」73%、「日本のことをよく知るため」71%が特に多いが、「楽しみ・ひまつぶしのため」も56%と高率である。

< 4 新聞をどれくらい読むか >

新聞を読むという者は57%である。しかし、中国と韓国以外のアジア出身者や欧米の留就学生では30%以下と少ない。読む者でも毎日読むというのは28%にとどまる。読むのに費やす時間は1回あたり20~30分が36%、50~60分が39%で、短時間型と長時間型の2タイプに分かれるようである。1週間にすると延べ3時間程度という者が36%で最も多い。よく読む記事は「国際」70%、「政治・経済」59%、「社会」56%、「社説・コラム」41%の順。いわゆる一般商業紙を読むケースが普通であるが、自分で購入して読む者は3割にすぎず、多くは学校の図書館などを利用している。新聞を読む目的は、「日本のことをよく知るため」71%、「日本語の勉強のため」61%、「生活に必要な情報を得るため」54%。予想どおりとはいえ、テレビとはやや異なる利用パターンを示している。なお、新聞を読まない者は全体の42%であるが、そのうちのほぼ4割が「日本語がよく分からないため」または「読む時間がないため」を理由にあげている。前者の理由は東南アジアと欧米の留就学生に多く、後者の理由は中国の留就学生に多い。